

1860年代のドストエフスキイと「リアリズム」

—Ан.グリゴリーエフの「リアリズム」論を中心に—

池田和彦

ドストエフスキイが、1868年12月Ан.マイコフ宛手紙で、独自の「リアリズム」を説いたことはよく知られている。(2802-389)¹彼の「リアリズム」論をめぐる論考は数多いが、ロシアでは当時「リアリズム」の語はまだ芸術用語として定着しておらず、様々なニュアンスで使われていて、彼の言葉も同時代の「リアリズム」論議をふまえて考える必要がある。そのさい彼との関連で注目されるのは、ロシア批評史上最も初期の本格的な「リアリズム」論を書いたАн.グリゴリーエフである。本稿では1850~60年代の「リアリズム」をめぐる状況を概観し、Ан.グリゴリーエフの論との関係を中心に、ドストエフスキイの「リアリズム」観の位置づけを考えてみたい。²

(1) 1850~60年代の「リアリズム」論. 補足

19世紀中葉のロシアにおける「リアリズム」の語の使用状況や「リアリズム」論については、Н.С.ソローキンやП.А.ニコラーエフの研究によっておよそのことを知ることができる。³しかし、いずれも対象をロシアの論者に限定し、いわゆる「批判的リアリズム」の形成を中心に記述しているため、必ずしも当時の「リアリズム」論全体を展望するものとなっていない。そこではじめにいくつか補足を行ない、「リアリズム」をめぐる状況の簡単な見取図を描いておきたい。

補足の第一は、60年代まで「リアリズム」は検閲で使用を禁じられた《натурализм》や《материализм》の代用語として用いられることがあって、必ずしも新たな芸術的主張をこめた言葉ではなかったことである。ロシア批評史上最初にこの言葉を用いて文学を論じたとされる、П.В.アンネンコフの論文「1848年のロシア文学概観」(『現代人』1849年1月号)からしてそうであった。ペリンスキイが用いた《натурализм》の語の使用が禁じられたため、⁴彼は「リアリズム」で代用したのだった。「リアリズム」の語の最初の使用例とされる「わが国の一部の作家たちは、リアリズムをこれに関してペテルブルグの雑誌に書かれたどの論文にもないほど限定された意味に理解した。」という一節が、⁵最初の使用例と

いわれながら、すでに「リアリズム」論議があったかのような記述になっているのもそのためだった。

また1860年代に入って「リアリズム」の主張が広がるのに大きな影響を与えたとされるドブロリューボフの「リアリズム」も、「マテリアリズム」の代用語の性格が強い。彼は1858年の「ロシア文学の発展における民族性浸透の度合について」で、草稿に用いた「マテリアリズム」が検閲で不許可となると、「リアリズム」に代えて発表した。⁶その後彼が「リアリズム」の語を用いた批評が二つしかないことは、⁷彼が「現実的批評」(реальная критика)を提唱したのは事実としても、どれだけ「リアリズム」そのものに「マテリアリズム」と異なる意味をこめたのか疑問を抱かせる。

第二に、芸術上の「リアリズム」をめぐる論議が60年代に起こったのは、ドブロリューボフの影響だけではなかった。従来のソビエトの文学史は、60-70年代の「リアリズム」論の展開を急進派のいわゆる「批判的リアリズム」を中心に記述するため、その先駆者としてのドブロリューボフの意義を高く評価している。しかし、50-60年代の「リアリズム」論には別の系譜も存在した。その一つは、П. B. アンネンコフ、A. ドルジーニン、そしてАн.グリゴリーエフと続く反急進派の「リアリズム」論である。A.ドルジーニンは1850年代末、ゴンチャロフを対象に「リアリズム」の語をロシアの具体的な作家に当てて論じた。⁸またАн.グリゴリーエフは、60年代初頭ロシア文学における「リアリズム」とは何かを問う文字通りの「リアリズム」論をはじめて書いた。ドルジーニンは50年代半ば『現代人』の同人としてアンネンコフとのつながりも深く、彼の「リアリズム」言及はアンネンコフと共通の土壌から出てきたと推測される。一方、Ан.グリゴリーエフは50年代後半、ドルジーニンが編集していた『読者文庫』の執筆陣に一時加わっていた。ツルゲーネフとピーセムスキイを論じた彼の1861年の「リアリズム」論は、ツルゲーネフにおける詩的要素を強調した1857年のドルジーニンのツルゲーネフ論を受けつぐ面がある。⁹彼らはドブロリューボフのように文学に「リアリズム」を要求したわけではなく、ロシアの「リアリズム」史上重視されないのは理由のないことではない。しかし、Ан.グリゴリーエフは後に紹介するように60年代に「リアリズム」が論じられはじめる一つのきっかけとなる論をいくつか書いて、無視できぬ役割を果たしている。

補足の第三として忘れることのできないのは、フランスのレアリスム文学、美術の影響である。40年代から50年代にかけて台頭したフランスの狭義のレアリス

ム文学、美術が、ロシアのリアリズム芸術、リアリズム論の成立にどの程度影響があったか十分な研究は行なわれていない。¹⁰しかし、フランスでの論議がある程度知られていたことは、日本で参照できる限られたロシアの雑誌からもうかがえ、ロシアで50年代末からリアリズム論議が始まる一つの契機となったと推測される。

そうした例をいくつか簡単に紹介すれば、たとえばドストエフスキイも目にしたと考えられる早い時期の紹介記事に、ニコライ・サゾーノフ (H. Сазонов) が1857年『祖国雑記』(No.8.)に寄稿した「フランスの雑誌・書籍・パンフレット概観 4.5.6月」がある。彼はA.ミュッセやA.デュマ、E.シューやCh.ベルナール、バルザック等にふれてフランス文学の動向を語り、当時大きな反響をよんでいた『ボヴァリー夫人』との関連で「リアリズム」について次のように説明した。

《バルザックの後継者たち、すなわちパリでいわれている小銭たち、偉大な小説家にとって代わった過去の現在に対するおつりである彼らのほとんどは、

『人間喜劇』の作者が切り開いた広大な領域のごく一面しか研究してこなかった。彼らはバルザックが自分の理想的な建築物の土壌、土台に利用したにすぎないリアリズムを信頼しきっていた。リアリズム自体は、バルザックの模倣者の理解や今日の時代の傾向にごく近いものである。今世紀はじめ科学や文学をひきつけた18世紀の抽象的な関心の対象、観念論的な思弁や志向は、ついに人心を飽きさせた。そして現代の時代は、確かに狭くはあるが分かりやすく便利なむきだしの現実に甘んじている。》¹¹

そして「リアリズム」がヨーロッパ文学で支配的であることを述べて次のように続ける。

《リアリズムは必ずや伝記的物語に行くつくもので、それゆえこの傾向の代表者ディケンズとサッカレーは架空の人物の伝記を書いた。しかし、この道の二大家は思いがけず激しい運命の変転のさなかでも自分自身に、自分の本質的な性格に忠実な人物を明確に描くように努めた。そのため彼らが偶然によって様々な社会的地位や国、境遇におかれても、たとえば『虚栄の市』のヒロインの同一性、自己への忠実さを誰も疑がわない。このような意味でのみ伝記的小説は芸術的、道徳的意義をもつのだ。》¹²

また注目すべき若い思想家としてE.ルナンやI.テーヌなどにふれ、思想界にも新たな世代が台頭していることを報告している。

「リアリズム」への言及は1859年の『祖国雑記』にも二つ見られる。第123巻のC.ドゥドゥイシキンによる「外国文学概観—フランスにおける現在の愛」では、やはり『ボヴァリー夫人』に関連して、ラブレーを草分けとする自然派（レアリスム派のことを指す）が狂乱派（растрепанная школа, école échevelée）と呼ばれ、ゴーゴリもそのなかに入れていること、「リアリズム」が理想や感情を排除するものではないことをいう。¹³ また同じ筆者による第126巻の「フランスのリアリズム小説—エルネスト・フェドー・『ダニエル』」では、フェドーやフロベールについて次のように説く。

《現代のフランスの作家中、この分析の大胆さ、描写のリアリズムで最初にきわだったのが『ボヴァリー夫人』の作者ギュスターヴ・フロベールである。しかし、フロベールやフェドーの自然主義を18世紀の好色文学と混同してはならない。（中略）ここでは逆に現実の土壌の上に立ち、真実をとらえ、まったく包み隠しや潤色なしに人生をありのままに描きたいという願望が著しい。（中略）…ただフロベールやその他の者の作品が、その特徴の点で我国不朽のゴーゴリによって築かれた自然派に非常に近いことを指摘しておこう。》¹⁴

紹介されはじめたレアリスム文学が、ロシアの自然派に似たものとして受けとられたことがわらう。「リアリズム」の語がまだ一般化していなかったためか、レアリスト派を「自然派」《натуральная школа》、「リアリズム」を《натурализм》と言い替えているのも特徴的である。また論題に使われた《реалистический》については、ソローキンがこの語が現われるのを60年代なかばと指摘しているが、¹⁵すでに50年代末に用いられていたことが確認できる。50年代後半の『現代人』や『祖国雑記』、『ロシア報知』レアリスム関連の記事はごくわずかであるが、上のような例からも、50年代末からロシアの文芸批評で「リアリズム」の語が使われだした背景に、『ボヴァリー夫人』等を契機とするフランスでのレアリスム論議の影響があったことがうかがえよう。

実際作品のうえでも、1858年に『ボヴァリー夫人』や『ファニー』（E.フェドー）、1859年に『ダニエル』（同左）など、フランスで話題を呼んだ小説が翻

訳され、リアリズム文学の初期の紹介が行なわれた。¹⁶同様の紹介記事はドストエフスキイの雑誌『時代』にも載せられている。1862年3月号のW.レイモンによる「フランスにおける最近の文学動向概観」の翻訳がそれで、論文中にはフロベールやフェドー、シャンフルーリ等とリアリズムをめぐる論議や、ゴーチエ、ボードレル、バンヴィル等の詩人の紹介も含まれている。¹⁷約50頁にわたるこの論文の掲載は当時としては数少ない本格的な同時代のフランス文学紹介で、冒頭にはドストエフスキイによる簡単な紹介文も付されており、彼が同時代のフランス文学についてかなり詳しい知識を持っていた可能性のあることを推測させる。ロシアの「リアリズム」論議がフランスのリアリズムの動向と関連のあったことは、ロシアの辞典類で最初に芸術上の「リアリズム」の項を設けたとされる1864年のФ.トーリの『百科照会辞典』《Настольный словарь для справок по всем отраслям знания》のクールベに言及した記述からもうかがえる。¹⁸また同じくクールベを「リアリズム」を体現する画家として紹介し、芸術における「リアリズム」を論じたものに、1865年露訳されたプルードンの『芸術の原理とその社会的任務について』(1865)がある。この本がクラムスコイやレーピンらに読まれたことは以前に少しふれたが、¹⁹さらにつけ加えれば、1860年代、ピーサレフの『リアリスト』と並び「リアリスト」の語を標題に冠した数少ない単行本であるA.ネミロフスキイの『わが国のイデアリストとリアリスト』(《Наши идеалисты и реалисты》, 1867)は、このプルードンの芸術論とピーサレフ、アントノヴィチの「リアリズム」論を対比的に検討するという形で書かれている。プルードンの論全体を支持したものではないが、ピーサレフやアントノヴィチが芸術を軽視し偏狭であるのに対して、プルードンは審美的な要求と生活上の「リアリズム」の要求が調和できることを「リアリズム」の観点から示そうとしていると評価している。²⁰プルードンの芸術論はロシアでよく知られたといい、²¹ドストエフスキイが『白痴』や『悪霊』で登場人物にプルードンに言及させた背景に、「リアリズム」の理論家としてのプルードンもあったことは注意してよいだろう。

ところで60年代初頭に戻れば、当時は「リアリズム」「リアリスト」という言葉を使って芸術を論じることはまだ稀であった。その頃代表的な「リアリズム」の作家とされたピーセムスキイの『荒騒ぐ海』(1863)の一節は、この言葉がまだ固苦しい学術用語臭さをただよわせていたことをよく示している。

《「ピーセムスキイ氏はリアリストです」とペトウツォロフは言った。私は彼

に何の反論もしなかったが、ただ、彼がこの難しい言葉を知っているのに驚いた。²²

農奴解放当時のペテルブルグのサロンの会話を描いた一節であるが、このようにピーセムスキイが1860年代前半代表的な「リアリズム」の作家として語られる一つのきっかけを作ったのが、61年のАн.グリゴリーエフの「リアリズム」論であった。²³

(2) Ан.グリゴリーエフのリアリズム論

Ан.グリゴリーエフは、1861年ロシア批評史上もっとも初期の「リアリズム」論に属する「ロシア文学のイデアリズムとリアリズム」(《Светоч》, NO.4) を発表し、²⁴さらに63年にも3つ「リアリズム」に関連する批評を書いている。「リアリズム」を論じることがほとんどなかった当時としては先駆的で、あまりふれられることのない非急進派の「リアリズム」論として注目すべき内容を含んでいる。特に61年と63年の論の間には微妙ではあるが重要な「リアリズム」観の変化が見られ、ドストエフスキイとの関連からも看過できない。²⁵

61年の論文は、ピーセムスキイとツルゲーネフを例にとってロシア文学における「リアリズム」の問題点を論じたものである。彼は理念なしにただ客観的、非情に民衆を描くピーセムスキイの「リアリズム」と、形式上の「リアリズム」を守りながら、詩的なもの、理想的なものを同時に織りこむツルゲーネフの創作法とを対比する。そして人物や事件の設定を一般的な環境のなかにおき、制約された条件のもとに生きる人物を描くピーセムスキイと、例外的な環境や感受性に恵まれた人物を描くツルゲーネフとを比較して、後者を詩的なもの、理想的なものを求める立場から擁護した。²⁶文学における「リアリズム」を「形式のリアリズム」(реализм формы) (現実の風俗、習慣、言葉使いに忠実に描くこと) と「内容のリアリズム」(реализм содержания) (作家の現実に対する態度、見方の「リアリズム」を指し、描写の恐ろしいまでの真実、結果を恐れぬ分析、対象に対する冷淡な平静さなどの特徴をもつ) の二要素に分け、前者がすでに19世紀の小説に必須の条件となっているのに対して、ピーセムスキイが代表する後者が詩的なもの、理想的なものをもっぱら排除し、それら関しても「リアリズム」を用いて十分検討することがないのを問題にしたのである。ピーセムスキイには「否定の

リアリズム」と呼べるような現実否定の理念しかないが、ロシアの現実には完成したものでなく、したがって現実の測定である「リアリズム」も曖昧なものにならざるえないという。

グリゴリーエフは次いで1863年の5月「A. H. セローフの5幕のオペラ『ユディフ』」（《Якорь》誌第12号）で、新たに《истинный реализм》という言葉を用いてセローフのオペラを論じた。「真のリアリズム」について、彼は次のように書いている。

《我々がこのさい真のリアリズムについて、すなわちそこでは完全な現実性と形式のナトゥラリズムのもとに、——理想が作品の土台として貫徹している、あるいは作品の上を飛翔している、——そういうリアリズムについて話していることは明らかだ。それゆえ、我々は（ユゴーのような一訳者註）偉大なフランス詩人の小説と（オストロフスキイのような一訳者註）わが国の偉大な劇作家の劇のように、明らかに非常に異質な作品を同列におく…。

このリアリズムはいたるところで勝利を収めている。鮮やかな典型的言葉と明確なイメージなくしては、現在、劇も物語も不可能だ。——実際ワーグナー以後、そしてわが国ではセローフ以後、それは不可能となった。》²⁷

そしてセローフのオペラには「リアリズム」の要求と聖書の偉大さ、簡潔さが結びついている点で、ワーグナー同様「真のリアリズム」の理念が反映しているという。61年の「リアリズム」論では、「リアリズム」と「イデアリズム」が結びついたツルゲーネフの作品を「イデアリズム」の作品とよんだのに対し、この論文ではそれが「真のリアリズム」であると、「リアリズム」の範中に入るように変化したのである。すなわち「リアリズム」を「イデアリズム」と対立させず、むしろ「リアリズム」は「イデアリズム」をも含むものとして概念が拡大された。そのため以前の論では明確だった二つの概念の区別が失われ、R. ヤコブソンが指摘したような今日の「リアリズム」概念の曖昧さが早くも生まれ始めたのである。²⁸

Ан.グリゴリーエフは翌号の「芸術と文学におけるリアリズム」でも「リアリズム」について論じた。内容はほぼ61年の論の要約であるが、いくつかより明確な見解がみられる。たとえば彼は「内容のリアリズム」は理想を排斥するものではなく、理想を意識しそれを求めることによってのみ生きることができる、と

「リアリズム」にイデアルな要素が不可欠であることを鮮明にする。真の芸術家の仕事がイデアルなものを志向する主観的な要素と、外的な世界を典型的な形象のうちに再現する客観的な要素から成ると述べ、ピーセムスキイは才能はあっても理想を欠いているため、オストロフスキイやユゴーのような同時代の最良の芸術家に対して、理想の点で対抗する単なる小説家に止まっているという。そしてロシアの「内容のリアリズム」も、本質的には現実に対する真にイデアルな関係の回復をはかるものだと説く。²⁹

彼はさらに《Якорь》第18号の「ピーセムスキイと我国の文学における彼の意義について」でも「リアリズム」に言及した。この論文も大部分が61年の論からの流用であるが、注目すべき変化が一つ見られる。それはB.エゴロフが指摘したように、³⁰61年の論で単に《реализм》あるいは《истинный реализм》、《полнейший реализм》と形容されたピーセムスキイの「リアリズム」が、《горький реализм》、《односторонний реализм》と置き換えられていることである。彼の「リアリズム」は「リアリズム」の一面を表わすに止まると限定的に評価され、しかも以前の論にはなかった否定的なニュアンスが加わった。³¹『荒騒ぐ海』以後急進派が行なったような全否定ではないが、ピーセムスキイに対する評価が微妙に変化し、「リアリズム」における「イデアル」な要素を重視する姿勢がより鮮明になったのである。

以上のように彼は「リアリズム」のなかの「イデアル」な志向の存在を強調し、「リアリズム」概念を拡大させたが、この変化は前述のように両者の明確な区別を失なわせかねぬ内容を含んでいた。

Ап.グリゴリエフの「リアリズム」論は、ドブロリユーポフの評論などと並びこの語が文学界で普及していく先駆けをなしたと推測される。というのも、ソローキン等の研究から判断する限り、彼以前にピーセムスキイを「リアリズム」との関連で論じた批評家は少なくとも今日名を知られるような文学者のなかにはいず、彼の論はピーセムスキイが60年代にしばしば「リアリズム」の代表的作家として言及される一つの契機となったと考えられるからである。実際、たとえばピーサレフは1861年の「19世紀のスコラ主義者」（『ロシアの言葉』NO.5,9）や「ピーセムスキイ、ツルゲーネフ、ゴンチャローフ」（同前、No.11）のなかで彼のこの年の「リアリズム」論にふれ、後者の論文ではピーセムスキイとツルゲーネフをリアリストとイデアリストとして対比するような捉え方に反論している。³² また後にふれるように、「リアリズム」との関連でやはりピーセムスキイを論じ

た1863年のシCHEDリーンの批評も、グリゴリエフの論との関連が推測される。

一方、Ан.グリゴリエフの論を継承してピーセムスキイを論じる批評もでた。H.ストラホフの「ピーセムスキイの作品集について数言」(『時代』1861.No.7)がそれで、ピーサレフと並んでグリゴリエフのリアリズム論にたいするごく早い時期の反響に属する。彼はグリゴリエフ同様、ピーセムスキイをゴゴリに端を発する否定的傾向に属する作家と述べ、「リアリズム」はこの傾向の別名であり、自然派がさらに発展したものという。³³しかし、ピーセムスキイの「リアリズム」は特殊個人的なもので、暗い現実を正確に描くばかりで高いものを目ざす志向や事物の本質を照らす光の欠け、³⁴描かれる人物も運命に受身に流されるばかりで自分の置かれた状況から抜けだそうとせず、劇や闘争に欠けている、と批判した。³⁵Ан.グリゴリエフの影響下にあっただけに、³⁶彼のいささか論旨の錯綜とした論を明快に整理した内容となっている。

さて、グリゴリエフの「リアリズム」論とドストエフスキイとの関係で注目されるのは、「リアリズム」における例外的なものの擁護とイデアルな要素の重視が、ともにドストエフスキイが自分の「リアリズム」の正当性を主張するさい強調した点であったことである。周知のようにドストエフスキイは、1868年12月のАн.マイコフ宛て手紙でロシアの「リアリスト」の「リアリズム」に対置して「我々のイデアリズム」を語り、一見例外的な事象の内に潜む真実を見出す独自の「リアリズム」の方法を語った。(2802-329)基本的にはイデアリズムの立場に立ちながら「形式のリアリズム」を守り創作にあたる方法を、彼も「真のリアリズム」と呼んだのだった。Ан.グリゴリエフ、その影響を受けたH.ストラホフ、そしてドストエフスキイの間には、土壌主義者として共通する「リアリズム」への対応がみられたのである。³⁷

もう一つ注目されるのは、グリゴリエフが「真のリアリズム」を体現した作品の例にオストロフスキイの劇や『レ・ミゼラブル』を挙げていることである。特に『レ・ミゼラブル』を挙げているのは、彼のいう「リアリズム」が、我々が19世紀のリアリズム文学としてイメージするものよりロマン主義的であったことに気づかされよう。³⁸『レ・ミゼラブル』はグリゴリエフのいうセローフのオペラ同様、「形式のリアリズム」にキリスト教的な理念が結びついて作品の骨格が作られており、その点では『罪と罰』や『白痴』の構成とも通じている。ドストエフスキイがАн.マイコフ宛手紙で語った「真のリアリズム」も、仮りに彼の作品以外に例を求めたとすれば『レ・ミゼラブル』あたりが近かったかもしれな

い。³⁹その理想主義と例外的、非典型的なものへの根強い志向は、彼らが純粹のリアリズムの世代というより、多分にロマン派の第二世代の性格が強いことを改めて感じさせる。

(3)ドストエフスキイの位置

ところで、Ан.グリゴリーエフと同じくピーセムスキイを論じて、別の面に力点を置いて「真のリアリズム」を主張した論者に前述のС.シCHEDリーンのいる。彼は1863年のオストロフスキイの『悲運』《Горькая судьбина》評（『現代人』No.11.）で、ピーセムスキイが「リアリズム」の傾向を代表する作家と見られていることに反駁し、「リアリズム」はしばしば誤解されるような対象の粗野で機械的な模写でないことをいった。それはとるにたらぬ些細な事象の内からも秘められた意味や生命を探らねばならず、例外的なものや一面的なものに敵対的であって、人間の際立った特徴ばかりをこれ見よがしに描くことは、「真のリアリズム」に反すると主張した。⁴⁰Ан.グリゴリーエフの論と対比してここで注目されるのは、シCHEDリーンの例外的、一面的なものに比重をおいて描く方法を「リアリズム」に反するとしていることである。「例外的なもの」や「一面的なもの」に言及しているのは、ドブロリューボフが『闇の王国の一条の光』ですでに『悲運』の登場人物の例外性をいって、シCHEDリーンのピーセムスキイが描く粗暴で愚かな救いのない民衆像に批判的であったことによる。⁴¹この点彼の批判する「例外的なもの」は、Ан.グリゴリーエフがツルゲーネフの場合に擁護した「例外的なもの」と必ずしも同じではない。しかし、シCHEDリーンの主張には、Ан.グリゴリーエフの「リアリズム」論を読んでいたことを推測させる部分もあり、『悲運』評と同時に『現代人』に載せられたH.ゲーの絵『最後の晩餐』に対する批評同様、Ан.グリゴリーエフの論をふまえながら自分の「リアリズム」の立場を明確にしてみせたことが考えられる。⁴²

二人はこのように「リアリズム」を通じて理想的なものを求める点は同じながら、作品にとりあげる対象として例外的なものを積極的に認めるか、あるいは日常的、一般的なものを重視するかで対蹠的な姿勢を示した。シCHEDリーンの例外的なものを排除する行方は、ベリンスキイから60年代の急進派へ受けつがれたもので、『分身』に対するベリンスキイの批判に始まり『女主人』や『罪と罰』『白痴』に加えられた事件や人物が幻想的、例外的だという批判は、そのことを

よく語っている。⁴³ベリンスキイやドブロリユーポフ、シCHEDロリン等急進派の論者が典型的な事象を通して普遍を求めたとすれば、ドストエフスキイは非典型的な事象（彼自身はそうと認めなかったが）から普遍的なものをつかもうとする道を選んだといえよう。⁴⁴

D.チジェフスキイは『19世紀ロシア文学史』のなかで、ロシアのリアリズムに解決し難い二つの傾向の衝突があったことを指摘している。すなわちツルゲーネフや急進派のリアリスト作家、チャーホフなどにみられる実人生でしばしば起こりうる典型的な現象を描く傾向と、ドストエフスキイやレスコフのように非典型的で普通でない人々や事件に興味を持つ傾向の対立である。⁴⁵これは実際の作品の傾向として語られたものだが、二つの傾向の対立は、Ан.グリゴリーエフとシCHEDロリンの対立に見られたように、当時の「リアリズム」論のうちにも存在したことが確認できよう。「リアリズム」にこのような二つの行方のあることは、すでに1855年フランスの批評家A.ポンマルタンが次のように指摘していた。

《人々は数年来レアリスムという言葉をおよぼしに乱用してきたので、この言葉は正体がわからなくなった。しかし、その語の本来の意味、最初の意味に立ちかえるならば、我々は芸術におけるレアリスムとは、あらゆる詩情を排した、あるいは現実の中にのみ詩情を求める現実についての真の、もしくは過度の感情と進んで言おう。それゆえ、レアリスムはその名にもとることなしにきわめて異なった状況のうちに展開されることができる。すなわち、レアリスムは誰もが理解し誰れもがそこに自分を見出し、自分自身の性格を目のあたりにするがゆえに気に入られる卑俗な側面からだけ真実を捉えることもあろうし、あるいはまた真実を逆の側面から、すなわち例外的なもの、色彩においても風味においても常に洗練、退廃、誇張された濃密なたぐいまれな美や醜、崇高ないしは低俗にかかわる側面から捉えることもあろう。》⁴⁶

1868年12月のАн.マイコフ宛手紙で語られたドストエフスキイと急進派の「リアリズム」をめぐる対立は、ポンマルタンが指摘した「現実」のどの部分に重点を置くかの違いに由来している。ドストエフスキイの例外的なもの、病的、異常なものへの関心は、多分にロマン派の美学を受け継ぐものであったが、そうした事象のうちに潜む真実の探求が、典型論を基礎とする19世紀的リアリズムをこえて20世紀文学の先駆けとなったことはいままでもない。⁴⁷60年代の範囲をこえて

つけ加えれば、ドストエフスキイは1873年の「展覧会について」で、理想を描くことを恐れて歴史画を回避しもっぱら風俗画に専念する同時代のロシアの画家たちを批判して次のように述べている。

《「あるがままの現実を描かねばならない」と彼らは言うが、そのような現実
はまったく存在しないし、また、これまでこの世にあったこともない。なぜなら
事物の本質は人間には捉えがたく、人は自然を自分の感覚を通過し、観念に
映じたように知覚するからである。それゆえ、もっと観念をはたらかせ、理想
を恐れないようにしなければならない。》(21-75)

人間から独立して先験的に存在する「現実」、あるいはそのような「現実」の認識の可能性の否定は、客観的な「現実」の存在を認めて、その再現をめざす19世紀的な「リアリズム」の立場を否定するものとなっている。現実認識における主観の重要性を説く彼の主張は、「観念をもっとはたらかせ」という言葉を想像力をはたらかせることと解せば、やはり20世紀の内的なリアリズムの立場に通じていく。ドストエフスキイが20世紀に迎えられることになる一つの要因であるが、彼は急進派の彼の作品に対する幻想的、例外的という批判に対し、日々の新聞に報ぜられる現実の事実こそ怪奇で幻想的だと反論し、(29-19)物語の真実らしさを保つためにА.Григорьевのいう「形式のリアリズム」を守りながら、様々な工夫をこらして創作にあたっていったのである。

*

*

本稿の課題である1860年代の『リアリズム』論をめぐる状況とドストエフスキイの位置づけの概観は以上のとおりであるが、最後に本稿では正面からとりあげていない彼のリアリズム観をめぐる問題点につき、一言付言しておきたい。今日、ドストエフスキイのリアリズム観の独自性を論ずるさいには、ヴァチェスラフ・イワーノフが『自由と悲劇』のなかで述べた言葉を引くことがしばしば行われている。彼はドストエフスキイの晩年の有名な言葉「人々は私を心理家と呼ぶが正しくない。私はただより高い意味のリアリストなのだ。」(27-65)に関連して、「より高い意味のリアリズム」を「リアリスティックな象徴主義」と呼び、これについて「芸術における象徴主義は見るものの魂を現実からより高い現実へ導く、(中略)低い次元の存在論的により価値の少ない現実から、よりリアルな現実

導く。」と述べたのだった。⁴⁸しかし、この現実観がきわめて象徴主義的な立場からのものであることは、S.リナーの指摘するとおりで、彼はドストエフスキ自身はこのような「現実を超える現実」に言及したことはほとんどないと、安易にイワーノフの解釈にのることを戒めている。⁴⁹そのことはイワーノフの代表的な象徴主義論である「現代の象徴主義の二要素」(1908)や「象徴主義についての考え」(1912)などからもうかがえ、⁵⁰象徴主義的な世界像を1860~70年代のドストエフスキに当てはめる時代錯誤を犯している危険があるのである。もちろん、キリスト者としてのドストエフスキが「より高い現実」として神の支配する世界を考えていた可能性は否定できないが、こと「リアリズム」に関する限りそうした世界像、現実観とはっきり結びつけて言及したことがないのは、S.リナーの指摘するとおりである。この問題については後日稿を改めて論じることにはしたいが、本稿の概観からもうかがえるように、少なくとも1850~60年代にイワーノフ流の現実観、リアリズム観はドストエフスキおよび彼の周囲にはなかったことを確認しておきたい。

(註)

- (1) アカデミヤ版30巻本ドストエフスキ全集の参照箇所は、本文中に(巻数一頁数)で示す。
- (2) 本稿では、今日一般化したリアリズムとは異なる当時のリアリズムを表わすものとして括弧つきの「リアリズム」を用いる。また「リアリズム」について論じたものだけでなく、「リアリズム」の語を用いて文学を論じたものも「リアリズム」論と呼ぶ。
- (3) Ю.С.Сорокин. К истории термина реализм (40~60-е годы ХХ века) .Уч. зап. Ленинградского гос.ун-то.серия филологических наук.вып.17.1952. П.Николаев. Развитие теории реализма в русской литературе середины хх века. в кн. Развитие реализма в русской литературе. т.2.кн.1. М., 1973.
- (4) Janina Kulczycka-Saloni. La réception du naturalisme dans la littérature russe et la littérature polonaise. in La Naturalisme en Question. Paris.,1984.p.31.
- (5) П.В.Анненков. Заметки о русской литературе прошлого года. 《Современник》. 1849.No.1. отд.Ⅲ.с.9.

- (6) О степени участия народности в развитии русской литературе.
Н.А.Доблюбов. Собр. соч. в 9 томах. т.2. М-Л.,1962.
Добролюбовが「マテリアリズム」の代わりに「リアリズム」の語をあてたことについては下記を参照。
В.Кирпичин. Философские эстетические взгляды Салтыкова-Щедрина.М., 1957.с.331.
- (7) 1860年の「善意と事業」(《Благонамеренность и деятельность》)と「イワン・ニキーチンの詩」(《Стихотворение Ивана Никитина》)の2つ。
- (8) 1859年の《Обломов. Роман И.А.Гончарова》。
А.В.Дружинин. Прекрасное и вечное. М.,1988. с.447.
- (9) 《Повести и рассказы И.С.Тургенева》. в кн. А.В.Дружинин. Собр. соч. в 8 томах. т.7. Спб.,1865.
- (10) 部分的にこの問題にふれたものはもちろん見られる。たとえば1982年刊行の『リアリズムの時代』によれば、ロシアでのI.テーヌの最初の翻訳は、1861年ドストエフスキイ兄弟の雑誌『時代』第6号に載せられた。
П.Р.Забров. Ипполит Тэн в России. в кн. Эпоха реализма. Л.,1982. с.228.
- (11) К.Штахел. Обзорение французских журналов, книги и брошюр:апрель, май, июнь. 《Отечественные записки》. 1857. т.113.отд.№.с.45.
なお、К.シュタヘルは、Н.サゾーノフのペンネーム。
- (12) Там же.
- (13) С.Дудышкин. Нынешняя любовь во Франции.《Отечественные записки》. 1859. т.123.отд.№.с.24.
- (14) Реалистический роман во Франции. E.Feydeau.Daniel.,étude en six parties. 《Отечественные записки》.1859. т.126.отд.№.с.115.
- (15) Ю.С.Сорокин. К истории термина «реализм» в русской критике. Изв. Акад. Наук СССР. отд.Литературы и языка.1957.т.151.вып.3.с.207.
- (16) たとえばフロベールについては、拙論、「ロシアにおけるフロベール概観(1857-1870)」。《Rusistika》. No.7.1990.を参照。なお、リアリズム文学の紹介は60年代に入って一時途絶え、本格的な紹介が始まるのは70年代以降である。また初期の翻訳紹介に、フランスで代表的なリアリズム作家とされたジャンフルーリが含まれていないのは特徴的であるが、サゾーノフは

1856年の『祖国雑記』の記事で、シャンフルーリの作品がロシアでも知られていると述べている。ただし、その真偽は定かでない。

《Отечественные записки》.1856.т.109.отд.V.с.150.

- (17) 《Время》. 1862. No.2.отд.I.с.с.178-179.

リアリズムについては、およそ次のように言う。「それゆえレリスムとは特定の時代感覚、あるいは言いたければ、ある時代固有の本能である。人間の精神力のなかで、この感覚が低い地位しか占めていないとしても、それでも、この感覚の土台に社会や自然に対する真率で理性的な観察があれば、それは正当で非常に深いところまで達することができる。もちろん、それはホーマーやダンテ、シェークスピア、モリエール、ゲーテなどのような全世界的、全人類的な作品を生むことはない。(中略)しかし、リアリスムの靈感は少なくともその時代を特徴づけ、その靈感に貫かれた作家の個人的な刻印をもたらすだろう。端的に言って、それは我々が独創的な作品と呼ぶものを生むのである。不幸なことに、そのような作品に現在のフランスで出会うことは稀であるが。」(同上誌、176頁。)

- (18) Ю.С.Сорокин. Указ. соч.с.255.

および、拙稿、「ドストエフスキイの『最後の晩餐』(H.ゲー)評小考」。
《Rusistika》.No.5.1988.pp.18-19.参照。

- (19) 拙稿、「『白痴』における『ボヴァリー夫人』」。《Rusistika》. No.8.pp.1991.187-188. なお西欧のリアリズム絵画に言及した早い例としては、フランスの「似非リアリスト」の代表としてクールベに批判的に言及した『モスクワ人』1851年No.5.の記事がある。この点については、下記を参照。
Г.Стернин. Художественная жизнь росии середины ХХ века. М.,1991. с.167.

- (20) А.Немировский. Наши идеалисты и реалисты. Спб.,1867.с.с.40-41

- (21) Г.К.Шенинков. Достоевский и русский реализм. Свердловск.,1987.с.114.
シェニンコフはそのように述べる根拠にふれていないが、А.ネミロフスキイのほかЕ.зарин(『祖国雑記』1866.vol.168.)やВ.Едельсон(《Всемирный труд》.1867.No.1)がプルードンの芸術論を論じた批評を書き、М.А.アントノヴィチも1866年、チエルヌイシエフスキイの美学論とプルードンの芸術論の共通性を指摘する評論を『現代人』に載せようとした。またガルシンの小説『画家たち』《Художники》(1879)には、プルードンの芸術論を読むア

カデミーの美術学生が登場してくる。さらに、ロシアの移動派の理論的指導者であったクラムスコイやB.スターツフは、プルードンの芸術論を評価している。なお、リアリズムの理論家としてのプルードンについては、下記を参照。

J.H.Rubin. *Realism and Social Vision in Courbet and Proudhon*.
Princeton.,1980.

また、60年代以降の美術の領域における「リアリズム」の語の浸透については、ソローキンの前掲1957年の論文207頁を参照。

- (22) А.Ф.Писемский. Полн.собр.соч.т.3.Спб.,1910.с.434.
引用文中の「むつかしい言葉」は、原文では《учёное слово》。
- (23) Ап.Григорьев以前にピーセムスキイを「リアリズム」との関連で論じた論者のいないことから。
- (24) この論文は単に「リアリズム」という言葉を用いて文学を論じただけでなく、ロシア文学における「リアリズム」そのものをテーマとした最初の本格的な「リアリズム」論であった。
- (25) Ап.Григорьевの「リアリズム」論を含む批評活動については下記に詳しい。
Б.Егоров. Борьба эстетических идей в росии в середине хх века. Л., 1982.с.с.160-211.
Ап.Григорьевに後述する1863年のリアリズム関連の評論があることは、同書に教えられた。また、彼の文学観については下記に詳しい。
望月哲男。「有機的批評の諸相—アポロン・グリゴリーエフの文学観—」。
《Slavic Studies》.No.37.1990.
- (26) Ап.Григорьев. Собр.соч. вып.4. М.,1915.с.с.5,17-20.
- (27) Ап.Григорьев. 《Юдиф》 опера в пяти актах А.Н.Серова. 《Якорь》. 1863. No.12.с.223.
- (28) R.ヤコブソン。「芸術におけるリアリズムについて」。『ロシア・フォルマリズム文学論集1』。せりか書房。1971.参照。
- (29) Ап.Григорьев. О реализме в искусстве и литературе. 《Якорь》. 1863. No.13. с.с.242-243.
- (30) Б.Егоров. Указ. соч.с.с.195-196.
- (31) Ап.Григорьев. О Писемском и его значении в нашей литературе.

《Якорь》. 1863. No.18. с.341.

- (32) Д.И.Писарев. Собр. соч. в 4 томах. т.1.М.,1955.сс.118,211.
- (33) Н.Страхов. Несколько слов о г.Писемском по поводу его сочинений.
т.1. 《Время》.1861.No.7.отд.II.с.14.
- (34) Там же. сс.16-17.
- (35) Там же. с.18.
- (36) この時期のН.ストラーホフがА.グリゴリーエフの影響下にあったことについては下記を参照.

Linda Gerstein. Nikolai Strakhov. Cambridge, Massachusetts., 1971.
pp.65-68.

- (37) 実際たとえばП.Н.Ткачевは、1869-72年頃書かれた《Принципы и задачи современной критики》のなかで、Ап.グリゴリーエフ、Н.ストラーホフ、Н.ソロヴィヨフ等、『時代』『世紀』誌の批評家たちを、ドブロリユーボフの《реальная критика》に対立する《эстетическая критика》の実践者と位置づけている。

П.Н.Ткачев. люди будущего и герои мещенства. М.,1981.с.34.

ただし、ストラーホフは1869年の『戦争と平和』論で、日常的な事象からイデアルなものへ向かうトルストイの行き方を高く評価し、ドストエフスキイはこれを自分の「リアリズム」の立場を否定するものと受けとったと推測される。

Ф.М.Достоевский. Письма. Под.ред.А.С.Долинина. т.1.М-Л.,1930.с.446.

- (38) 同様の見方は下記にも見られる。

А.Альтшулер. Достоевский и русский театр его времени. в кн.

Достоевский и театр.Л.,1983.с.65.

ただし、パリの下水網について詳細に語ったような『レ・ミゼラブル』の一面に、当時の人々が「リアリズム」を感じたことは十分推測され、「リアリズム」視される要素があったことは否定できない。

- (39) ドストエフスキイが『レ・ミゼラブル』を高く評価していたことについては、1877年4月17日付С.ルリエ宛手紙参照。(2902-151~2)

- (40) М.Д.Салтыков-Щедрин. Собр. соч. в 20 томах. т.5.М.,1966.сс.196-197.

- (41) Там же. с.588.

Н.А.Добролюбов. Собр. соч. в 9 томах.т.6.М-Л.,1963.сс.335-336.

- (42) この点については、前掲の「ドストエフスキイの『最後の晩餐』(H.ゲー)評小考」、p.24の註(20)を参照されたい。なお、シCHEDリーンとAn.グリゴリーエフのリアリズム論との比較については、すでに同論文で同じことを書いていることをお断りする。
- (43) И.Замотин. Ф.М.Достоевский в русской критике.Ч.1.1864-1881. Варшава. 1913.с.с.26-27,116,118.
- (44) S.Linnerはドストエフスキイの「リアリズム」観の特徴について、幻想的なもの、例外的なものを「リアリズム」のなかにとりこみ、その領域を拡大しようとした点にあると指摘する。
S.Linner. Dostoevsky on Realism. Stockholm.,1967.pp.119,206.
なお、例外的なものをリアリズムの範中にとり入れたAn.グリゴリーエフも、幻想的なものについては言及していない。
- (45) D.Cizevskij. History of Nineteenth-Century Russian Literature. tr. by R.N.Porter. vol.2. Nashville.,1974.p.8.
- (46) Armand Pommartin.Poètes et Romanciers modernes de la France: Charles de Bernard.《Revue des deux Mondes》,février 1855.I.P.541.
ポンマルタンにこの一文があることは、中谷拓士、『反リアリズム論—ロブ・グリエをめぐる』。創元社。1985.p.25.および下記に教えられた。
B.Weinberg. French Realism: The Critical Reaction,1830-1870. New York.,1937.p.128.
- (47) ドストエフスキイが古典的な典型論の立場に与しなかったことについては、1873年の『作家の日記』の「仮装した人」(21-88~89)、あるいは1874年2月のゴンチャローフのドストエフスキイ宛手紙を参照。
И.А.Гончаров. Собр.соч. в 8 томах.т.8.М.,1955.с.с.457,459.
- (48) Vacheslav Ivanov. Freedom and Tragic Life. tr.by M.Bowra. New York., 1971.p.49.
- (49) S.Linner. op.cit. pp.205-206.
- (50) たとえば引用した《a realibus ad realiora》の句は、二つの論文にも登場してくる。
Вячеслав Иванов. Собр. соч. в 4 томах. т.2. Брюссель., 1974. с.с.553, 561,611.
- (51) Там же. с.547.